はじめに

本書は、平安時代の散文を本業とする著者が、勝手に「裏専門」と呼称するマンガ・アニメに関する著書である。一九八八年に東京書籍から出版された日本児童文学学会編『児童文学事典』には、手塚治虫、ちばてつや他、主要なマンガ家が既に立項されており、それほど盛況とは言えないが、大学ではマンガを題材とした卒論等も提出されているというのに、いまだにマンガを文学として認めない向きがあるというのは嘆かわしいことである。そもそも本書第一章でも説くように、これまでは「文字」しか記録媒体がなかったため、文学は「文字で書かれたもの」と思われてきたのであって、録音、録画等、様々な記録媒体が存在する現代では、それらで記録されたものも文学として認められるべきであり、そういう意味では絵と文字から成り立つマンガも立派な文学なのである。蛇足を言えば、この原稿を書いている二〇一九年には、そんなものとは無縁と思われてきた大英博物館でも、遂にマンガ展が開かれており、フランスの日本マンガ好きは有名であるから、ある意味、外国の方が物わかりが良いのかもしれない。

そういうわけで「あとがき」に詳しく記すように、現在勤めている大学の大学院で「現代ポップカルチャーにおける異界―日本人の深層意識を探る」というテーマで研究費を頂いたこともあり、これまで二〇年に亘って書きためてきたマンガに関する論考を、まとめてみようと思ったのが本書である。初出の論文が二〇年前のものであるから、ここで取り上げた作品はいささか古い

ものが多いが、最近のマンガ・アニメ界は、ネタが尽きてきたこともあるかも知れないけれどもリメイクばやりであるし、インターネットが普及してから、古いマンガ・アニメも簡単に見ることができ、我々の世代では通時的に捉えていたものを、最近の若者は「時代」等には全く囚われないので（お陰で話がかみ合わないこともあるが）、分からないこともなかろうと思う。それに何より、最終章だけは、現在も研究を継続していることを示す意味で最新の作品を取り上げてみたが、そうした「継続」の目で見ても、各章のテーマを語るのにそれ以上ふさわしい作品が他に思いつかなかったのが、あえて「変更しなかった」理由である。

最後に本書を読む上での注意を若干付け加えておけば、本書ではマンガとアニメを厳密に区別はしなかった。何故なら、多くを語ると別書を用意しなければならないので結論しか述べないが、マンガ（最近ではラノベも）を原作とするのが日本アニメ（この言い方は実は正確ではない。スペルからアニメーションの省略形は「アニメ」にならないからであり、「アニメ」とは本来日本のものしか指さない。本書も以下ではその用法に従う）の特徴であるからである。

また、違う出版社のもので恐縮だが、本書は拙著『アニメに息づく日本古典』（新典社新書　二〇一〇年）の元本である。後から出るのに「元本」というのも妙なものだが、当時の出版界では、あれ以上オタク度の高いものは出版して貰えなかった。まさに時代に感謝といったところだが、悪友の何人かにその時、「もっとオタク度の高いものを出せ。お前なら出せるだろう」と言われたものである。ようやくそのリクエストに応えることができた。そのつもりで読んでいただけたら幸いである。

目　次

はじめに……i
第一章　文学の新しい定義……1
第二章　現代版『竹取物語』・セーラームーン……21
第三章　現代マンガにおける異界……47
第四章　麻宮騎亜原作『コレクター・ユイ』……71
第五章　時と向き合った諸作品……93

第六章　「引用」について……117
第七章　テレビゲーム「サクラ大戦」の文学性……137
第八章　渡瀬悠宇『ふしぎ遊戯』の構成美……167
第九章　引用の織物としての『犬夜叉』（高橋留美子作）……183
第十章　新旧「セーラームーン」アニメの比較によるジェンダー理解の変容……201
第十一章　今も残る「異界」
——『スター☆トゥインクルプリキュア』と『宇宙戦艦ヤマト２２０２』をサンプルに……223
初出一覧……239
おわりに……241

第一章　文学の新しい定義

さて最初はマンガはなぜ文学として扱えるかについてであるが、この問題について改めて真摯に向き合うことになったきっかけは、二〇〇八年に成蹊大学から、「文学と絵画の関係について考える上で、マンガの側面からも語ってほしい」と依頼が来たことである。その際、文学と絵画の相違、あるいはマンガはいかにして文学たり得るかについて再考すると、極めて興味深い事象が出てきた。もちろんその場でたくさんの意見も賜ったが、本書の論述の前提となるものなので、ここに掲げておく。

1　文学の定義

どんなものでもそうだと思うが、一つのものがある範疇に属するか否かを判断するには、その範疇の正確な概念が掴めていなければならない。したがって、マンガが文学であるか否かを論ずるためにはまず、文学とは何かが分かっていなければならないが、これはなかなか難問である。我々は全て文学の専門家であるはずだが、その我々にしても、「文学とは何であるか」と